

台風19号から約2カ月

市民の足 別所線としなの鉄道に大きな爪痕残す



第61号
発行
2019年
12月25日(水)
上田西高 校
新聞委員 会
編集局
編集局長:松木萌愛
藤井彩香
奈良本梓
沼田りん花
高杉月
橋爪ここ菜
坂元舞羽
中村泉咲

10月12日(土)台風19号が長野県に上陸し、長野県は大きな被害を受けた。しなの鉄道では海野宿橋が崩落し、現在も橋の修復が完全に完了していないため一部区間では徐行運転を行なっている。上田電鉄別所線では千曲川橋梁が崩落し、現在でも一部区間の運休が続いている。災害から2カ月が経った今月、関係者へ市内の復興状況について取材を行った。(松木萌愛)



台風19号によって増水した千曲川は10月13日(日)の早朝、左岸堤防を侵食し、上田電鉄の鉄橋が崩落した。写真提供=上田電鉄

別所線

赤い鉄橋崩落

運輸課長「啞然とした」

10月13日(日)の早朝、前日の豪雨によって増水した千曲川が左岸の高田屋旅館付近の堤防を侵食し始めた。この被害により上田電鉄の橋梁が

崩落。別所線にとって大きな損害を与えた。「現場を確認していた社員が送ってくれた写真を見て啞然とした」と上田電鉄運輸課長の矢澤勉さんは話す。台風による千曲川の増水のため、電車は運休していたが、大きな事故はなかったが、大正13年に架かった上田市のシンボルが無残に崩れ落ち、濁流に揉まれる姿に多くの市民が言葉を失った。実際に通学で別所線を利用して

いる生徒からも想定外の光景に「言葉が出なかった」という声が多く聞かれた。翌14日(月)は終日運



取材に応じてくれた上田電鉄の矢澤運輸課長。

休。15日(火)は上田から下之郷の間で代行バスが運行した。下之郷から別所線温泉までは電車が動き、通常ダイヤ71本のところ、災害直後は39本で運行。11月16日(土)からは上田から城下まで代行バスとし、城下から別所線温泉まで電車が運行した。「この日に下之郷と城下間が運行できたことは大きかった」と



赤い部分が国の管轄区域。東御市より上流は県の管轄であり、権限代行によって国が復旧を引き受けた。写真引用=信濃毎日新聞

利用者からのメッセージ励みに



「上田電鉄の矢澤勉運輸課長によると、「工事ができるのは11月から4、5月の濁水期のみ」だそうだが、今年度の濁水期間に崩れた橋を撤去し、使用できるか出来ないか判断する。もし使用可能であれば、落ちてしまった橋を再利用する予定だそうだが使用が不可能ならさらに復旧までの時間がかかる。応急復旧によって急造された堤防が鉄橋を載せる強度を保て

た。その他「必ず復旧させてください」「頑張ってください」というメッセージが寄せられた。千曲川左岸堤防の応急復旧工事を行った栗木組の代表取締役社長栗木悦郎さん、土木課長竹内信介さんに話を聞いた。今回の台風による増水で、千曲川が氾濫危

険水位を上回る水位に達し、その影響で高田屋旅館前の幅5mの堤防道路が約50cmほどまで崩れた。11日(金)の時点で「今回の台風は普通ではない」と栗木社長は直感していたそう。その日のうちに、災害時の対応を検討するべく会議を行った。

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所と災害協定を締結している栗木組は、宮下組とともに河川事務所からの要請を受け、堤防崩落直後から復旧工事を開始。消波ブロックを使い川の流れを変え、堤防侵食の進行を遅らせる作業を行った。しかし消波ブロックの数が足りず、長野、松本、上越から運搬した他、袋詰め玉石を用いて工事を続け、その際同時に土の盛り立てをし仮堤防を造った。

こういった状況ではあるが、利用者からは励ましの声が届いているという。矢澤課長は「『赤い鉄橋は上田のシンボル』という声が多かった。このようなメッセージ、長野大学生による募金活動、小学生からの寄付などにより改めて別所線が愛されていることが分かった。その他「必ず復旧させてください」「頑張ってください」というメッセージが寄せられた。千曲川左岸堤防の応急復旧工事を行った栗木組の代表取締役社長栗木悦郎さん、土木課長竹内信介さんに話を聞いた。今回の台風による増水で、千曲川が氾濫危

険水位を上回る水位に達し、その影響で高田屋旅館前の幅5mの堤防道路が約50cmほどまで崩れた。11日(金)の時点で「今回の台風は普通ではない」と栗木社長は直感していたそう。その日のうちに、災害時の対応を検討するべく会議を行った。

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所と災害協定を締結している栗木組は、宮下組とともに河川事務所からの要請を受け、堤防崩落直後から復旧工事を開始。消波ブロックを使い川の流れを変え、堤防侵食の進行を遅らせる作業を行った。しかし消波ブロックの数が足りず、長野、松本、上越から運搬した他、袋詰め玉石を用いて工事を続け、その際同時に土の盛り立てをし仮堤防を造った。

現場で復旧工事の指揮をとった竹内課長は「20年間で初めての経験だった、今までいろんな現場で作業をしてきたがまさか千曲川がこれほど大きな被害にみまわれるとは想像していなかった」と話した。栗木社長は「かつて長野県が公共事業によるインフラ整備に慎重だった時期もあった。継続的なインフラ整備の重要性を一般の方々にも理解してもらいたい」と話した。

「上田電鉄の矢澤勉運輸課長によると、「工事ができるのは11月から4、5月の濁水期のみ」だそうだが、今年度の濁水期間に崩れた橋を撤去し、使用できるか出来ないか判断する。もし使用可能であれば、落ちてしまった橋を再利用する予定だそうだが使用が不可能ならさらに復旧までの時間がかかる。応急復旧によって急造された堤防が鉄橋を載せる強度を保て

た。その他「必ず復旧させてください」「頑張ってください」というメッセージが寄せられた。千曲川左岸堤防の応急復旧工事を行った栗木組の代表取締役社長栗木悦郎さん、土木課長竹内信介さんに話を聞いた。今回の台風による増水で、千曲川が氾濫危

険水位を上回る水位に達し、その影響で高田屋旅館前の幅5mの堤防道路が約50cmほどまで崩れた。11日(金)の時点で「今回の台風は普通ではない」と栗木社長は直感していたそう。その日のうちに、災害時の対応を検討するべく会議を行った。

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所と災害協定を締結している栗木組は、宮下組とともに河川事務所からの要請を受け、堤防崩落直後から復旧工事を開始。消波ブロックを使い川の流れを変え、堤防侵食の進行を遅らせる作業を行った。しかし消波ブロックの数が足りず、長野、松本、上越から運搬した他、袋詰め玉石を用いて工事を続け、その際同時に土の盛り立てをし仮堤防を造った。

「上田電鉄の矢澤勉運輸課長によると、「工事ができるのは11月から4、5月の濁水期のみ」だそうだが、今年度の濁水期間に崩れた橋を撤去し、使用できるか出来ないか判断する。もし使用可能であれば、落ちてしまった橋を再利用する予定だそうだが使用が不可能ならさらに復旧までの時間がかかる。応急復旧によって急造された堤防が鉄橋を載せる強度を保て

た。その他「必ず復旧させてください」「頑張ってください」というメッセージが寄せられた。千曲川左岸堤防の応急復旧工事を行った栗木組の代表取締役社長栗木悦郎さん、土木課長竹内信介さんに話を聞いた。今回の台風による増水で、千曲川が氾濫危

険水位を上回る水位に達し、その影響で高田屋旅館前の幅5mの堤防道路が約50cmほどまで崩れた。11日(金)の時点で「今回の台風は普通ではない」と栗木社長は直感していたそう。その日のうちに、災害時の対応を検討するべく会議を行った。

国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所と災害協定を締結している栗木組は、宮下組とともに河川事務所からの要請を受け、堤防崩落直後から復旧工事を開始。消波ブロックを使い川の流れを変え、堤防侵食の進行を遅らせる作業を行った。しかし消波ブロックの数が足りず、長野、松本、上越から運搬した他、袋詰め玉石を用いて工事を続け、その際同時に土の盛り立てをし仮堤防を造った。

橋の復旧 最短で1年半後か 運行再開 2021年春を目指す

「安全確保の為、作業を一時中断せざるを得ない状況に幾度かみまわれ、心が折れそうになった」と2人は話した。現場で復旧工事の指揮をとった竹内課長は「20年間で初めての経験だった、今までいろんな現場で作業をしてきたがまさか千曲川がこれほど大きな被害にみまわれるとは想像していなかった」と話した。栗木社長は「かつて長野県が公共事業によるインフラ整備に慎重だった時期もあった。継続的なインフラ整備の重要性を一般の方々にも理解してもらいたい」と話した。

千曲川で権限代行適用

全長367kmを一は、その管理主体が場所によって異なる。別所線の橋梁が崩落した付近は国の管轄であり、同じく崩落した海野宿橋付近は県の管轄だ。災害時の迅速な復旧工事は高い技術と費用が必要となるが、災害の甚大さによっては県の復旧能力を超える場合がある。そこで、国は都道府県に代わって河川工事を

実施できる権限代行制度を創設した。権限代行は今回の災害では東御市海野地区など、千曲川各所で適用され復旧工事が進められた。

迅速な復旧工事が可能となる反面、工事を請け負う企業にとっては様々な行政と関わる必要があり、調整が難しい場合もある。(松木萌愛)

立地的には必然の災害か

「人的被害」を減らすことを最優先

しなの鉄道は10月11日(金)に台風対策会議を行い12日(土)午後からの連休を決めた。12日(土)には、千曲川の増水で東御市本海野地区の千曲川右岸の護岸が約300mにわたり崩壊し、それに伴い市道白鳥神社線の海野宿橋と海野宿間が崩落。橋の下を通る線路の安全確保に1ヵ月程かかった。現在のしなの鉄道の敷設に関するいきさつについては以下のような通説がある。「しなの鉄道は130年前、国鉄時代に敷設され



被害について話すしなの鉄道の宮原課長

た。蒸気機関車から排出される煙が地域の人に嫌がられ、特に上田地域は養蚕が盛んで、蚕への影響が懸念されたため、当時の中心地付近への鉄道敷設は反対された。また、夜には火花が上がり、それにより、かやぶき屋根の家が火事になると

この時期は選手権の県大会が行われていたが、サッカー部は災害の影響で3日間練習ができず、練習を再開できたのは試合の2日前だったそうだ。そのため対戦相手の対策を万全にできなかったという。練習を再開してからも、参加できない人が数人おり、車での送

心配された。当時は洪水など災害の危険地域という概念もなく、市街地から離れた低湿地帯に鉄道は敷設された。これを踏まえると、現在のしなの鉄道が敷設されている場所は、災害の被害を想定したハザードマップでは被災が想定される場所だということになる。ほとんどこの区間が災害発生

時に避難地域になってしまう。しかし今から線路や設備を安全な場所に移すには膨大な費用が掛かり、現実的ではない。今後の対策についてしなの鉄道地域連携室担当課長の宮原剛士さんは「早めの情報収集に努め、事前の判断をより正

確にし、人的被害が発生しないようにしていく」と話した。実際に利用している上田西高校の生徒に話を聞くと「代行バスや新幹線での代行輸送が開始されるまで家族の送り迎えが不可能な時は学校に通えず休んでいた。授業

に出れず大変だと思った」「電車が来ないと不便でも困った」という声も聞かれた。鉄道の連休によって不便になるかもしれないが、しなの鉄道は災害対策として、「人に被害を出させない」ことを一番に考えている。(松木萌愛)

通常運行も未だ仮復旧の状態

しなの鉄道



崩落した海野宿橋とその下を通るしなの鉄道の線路。写真提供＝しなの鉄道

土屋陽一上田市市長 「皆さんと心を合わせ復興を」

今回の台風による被害と復興について上田市の土屋陽一市長に話を聞いた。土屋市長は、「今までにない災害でも驚いた。多くの皆様が被害を受けた。まずはお見舞い申し上げたい。そして一刻も早く元の生活に戻れるように復興を頑張っていきたい」と最初に話した。また、「build back better (よき良き復興を)、One Naganoを掲げ皆さんと心を



取材に応じてくれる上田市の土屋市長。

市長は更に「上田市内にたくさん被害があったが、復興に優先順位はつけていない。ただ、大きな被害にあった所や、生活に密着している所から復興活動を行ってきたい」と今後の復興活動について話してくれた。(高杉月)

台風19号による想像を超えた被害から、しなの鉄道は復旧を続ける。台風関連の災害は、上田市民にとってはテレビの向こう側の世界だったもの。それが目の前で起き、多くの人が被災者となった。毎日、通勤・通学で当たり前のよう

に利用していたしなの鉄道が動かなくなると、しなの鉄道の宮原さんは「災害に対する意識が変わった」と話す。「会社が潰れるかもしれない」と

と初めて感じたという宮原さんは今回の台風被害を目の当たりにして「言葉がでなかった」と話した。東御市の海野宿橋の崩落によりその下を走るしなの鉄道の安全確保に時間がかかった。14日(月)の段階で構造物の専門家を招き、安全性が確保できるか検証を重ねたという。この影響で、上田駅と田中駅間が運行できなくなった。上田と田中駅間が不通となると上田西高校の生徒を含め、通勤・通学に大きな影響がでる。実際にこの区間の不通により車

学校にも倒木などの被害

上田西高校は千曲川の近くに立地しており、川の増水で堤防が決壊すれば被害は免れない。台風19号の際、堤防決壊の危険性が高まった10月12日(土)20時頃に本校の寮生は近くの公民館に避難した。寮生の阿部慶太さんは「怖かった、避難場所まで床が固く

て寝ずらかった」と話した。幸い上田西高校に越水の被害はなかったものの、ヒマラヤスギの倒木など被害をもたらした。ヒマラヤスギの片付けはサッカー部の寮生が手伝った。倒木を見た大橋征哉さんは「あんな大きな木が倒れると思わなかった」と災害の大きさを

感じたという。この災害を経験して野崎太輝さんは「自然に対する見方が変わった」と話した。

この時期は選手権の県大会が行われていたが、サッカー部は災害の影響で3日間練習ができず、練習を再開できたのは試合の2日前だったそうだ。そのため対戦相手の対策を万全にできなかったという。練習を再開してからも、参加できない人が数人おり、車での送



台風による学校への被害の様子。写真提供＝上田西高校

迎えてもらっている人もいたそうだが、災害後、予定通り行われた準々決勝では2対1で松本第一高校に見事勝利した。

準決勝でも勝利を収め見事決勝に進出を果たした上田西は、決勝で松本国際高校に敗れたものの準優勝という結果を収めた。

新チームの副主将を務め、昨年度のチームでも主力として活躍した戸板海さんは「準優勝という結果にはなってしまっただが応援して

10月12日(土)夜。どんどんと強くなる雨、次々と届く緊急速報、不安な一夜を過ぎ迎えた朝。テレビに写るのは川が氾濫し、浸水した家、救助を待つ人々、別所線の橋が落ちていく映像。目を疑うほどの光景に言葉を失った。

あれから2ヵ月。長野県は滅多に大きな災害に遭ったことはない。多くの人がその様に考えていたのではないだろうか。その中直撃した台風19号。私達に大きな影響を及ぼしたのは、しなの鉄道、別所

コラム「想定外」

線だ。多くの生徒が利用するこの2つの列車が止まって、本当に困った人が多かっただろう。しなの鉄道、別所線共に、今なお復旧活動が続いている。皆さんはこの災害を通して何を学んだか。決して他人事ではないと気づいた人も多いのではないか。自然は予測不能だ。だからこそ備え、様々な災害の例をただの出来事として捉えるのではなく、真剣に向き合い学ぶ必要がある。私達高校生に出来ることは何か。今一度自分自身に問いかける。(藤井彩香)